第8章 — 世界を歪ませる子供

CHAPTER 08 — THE CHILD WHO BENT THE WORLD

編集用再構成版｜元の会話内全文とは逐語一致しません

01 — 突入

午前十時十九分。エイドリアン・タイレルの作業場の北側入口に衝撃が走った。強化扉が湾曲し、天井から粉塵が降る。二度目の衝撃で錠が吹き飛び、警備システムに「PERIMETER BREACH」と表示された。

エイドリアンは純正認証モジュールを取り外し、レイチェルは Memory Stick PRO Duo MAX の原本と保全複製を別々のケースに収めた。ロイは西側の保守通路を指した。 技術者を先に出してくれ。俺は時間を稼ぐ」

「今の身体では長く戦えない」とレイチェルは言った。「わかっている」とロイは答え、エイドリアンから機械式隔壁の開放鍵を受け取った。「だから、長く戦うつもりはない」

02 — 真実を知らない兵士たち

武装した警備請負業者が突入した。指揮官はロイの名を呼び、投降を命じる。彼らは政府資産の回収と聞かされていたが、回収対象の頭部と生命維持中枢以外を破壊してよいという命令まで承知している者は少なかった。

ロイはその命令の存在を告げた。指揮官の照準が揺れた瞬間、ロイは古い手動操作盤に鍵を差し込んだ。防火隔壁が落ち、警備員を傷つけずに進路だけを分断する。

「ここで死ぬ必要はない」とロイは扉の向こうに言った。彼らの任務を阻むことと、彼らの命を奪うことは違っていた。

03 — 第五の隊員

大臣の命令で一般警備員が後退した。代わりに作業場の東側へ、小さな人影が現れた。クロノス。黒い制服に武器はない。雨だけが奇妙な動きを始める。左側では普通に落ち、右側では空中に留まり、さらに一部は上昇していた。

監視機の高度計は矛盾した數を返し、位置補正が失敗した。クロノスは航空機を見上げて言った。

「落ちないでね。まだ見終わっていないから」

組立室のロイの視界にも警告が浮かぶ。「SPATIAL REFERENCE FAILURE」。彼は出口へ歩くのをやめ、東側の暗い通路を見た。「クロノス」。「こんにちは、ロイ」。

04 — 二の間の距離

一瞬前には無人だった通路に、クロノスが立っていた。ロイが一歩近づくと、二人の距離はむしろ広がった。床の継ぎ目まで引き延ばされたように見える。

「空間を変えたのか。それとも、俺の知覚を変えたのか」「違いは重要？」。「重要になる」。ロイは落ちていた座金を投げた。金属片は空中で進路を曲げ、途中で失速して床に落ちる。二つ目は別の角度から投げ、三つ目はほぼ正常な軌道を描いた。

クロノスは笑った。「当たらないよ」。ロイは投げた場所と着地点を記憶した。命中を狙っていたのではない。異常がどこから始まり、どこで弱まるかを調べていた。

05 — 不可能な部屋

ロイは金属片をさらに散らした。一定の範囲だけ軌道が曲がり、ほかの範囲では普通に落ちる。場は均一ではなかった。クロノスの位置が変わると、歪みの境界も変わる。

突然、床が傾いたように感じられた。視覚による上下と身体の平衡感覚が一致しない。

「POSTURAL CONTROL ERROR」。ロイは柱に手を置き、換気装置の音と配管から落ちる水滴の間隔を聞いた。

「全部を変えているわけじゃない」と彼は言った。クロノスの笑みが薄れる。ロイは異常な空間にも、少なくとも測定可能な境界と変化の周期があると気づいていた。

06 — 水とベルの地

退避したレイチェルはマーラと連絡を取り、作業場の古い水理センサーを調べた。流量と圧力のずれは局所的だった。光学映像だけを信じるより、別系統の物理量を照合した方がよい。

レイチェルは有線の保守回路で、組立室の三つの機械式ベルを鳴らした。入口、中央、東側の順に音を送る。ロイには二つ目が遅れ、三つ目が先に届いた。「聞こえる？」とレイチェルの声。「ああ。地図だな」

ベル、水滴、転がる破片。それらを組み合わせることで、ロイは一つのセンサーが間違っていても、複数の基準を比較できた。クロノスは黙ってその様子を見た。

07 — 時間の端

「お前の力には方向がある」とロイは言った。「あらゆる方向を同時には伸ばせない」。クロノスは片手を上げ、距離と姿勢の基準を再び狂わせた。ロイは作業台に衝突し、肩に痛みが走った。

「賢くても時間には勝てないよ」とクロノスは言う。「俺は、お前が時間を止めているとは思わない」。ロイは息を整えた。「計測と空間の関係を変えている。だが、その形を保つためには調整が要る」

子供は表情を硬くした。ロイは攻撃しなかった。場が消えた一瞬、四メートルも離れていないクロノスへ届くことはできた。だが彼はその好機を見送った。

08 — 落ちる男

クロノスが再び場を広げた。ロイは床を失ったような落下感に襲われる。上下が区別できず、姿勢補正系は動作を繰り返した。NIL-11R の負荷が増す。「OUTPUT: 61%」。

ロイは自動姿勢補正を停止した。誤った基準へ合わせようとする動きをやめると、消耗は落ち着いた。彼は漂う破片を見た。軌道が一度に変化する瞬間がある。クロノスの場には再調整の周期があった。

破片の軌道が重なった瞬間、ロイは短く動いた。失われた三十パーセントを力で取り戻そうとはせず、戻ってきた支持構造の端をつかむ。室内が通常の形に戻り、ロイは片膝で着地した。クロノス自身がよろめいた。

09 — 傷つく子供

クロノスの呼吸が速かった。「何ができるか証明する必要はない」とロイは言った。子供は拳を握る。「そのために造られたんだ」。壁が震え、照明がねじれる。場は再び広がろうとしたが、今度はクロノス自身も恐れていた。

「やめたら、戻される」。子供の声が震えた。「どこへ？」「白い部屋」。ロイは一歩進む。「誰が戻す？」。クロノスは答えない。「大臣が怖いのか？」。「大臣じゃない」

空間が急激に縮み、子供が崩れ落ちた。ロイは最大出力を超えない範囲で飛び込み、小さな身体を受け止めた。歪みが消えた。作業場の時計は一度止まり、それから再び動き始めた。

10 — 六人目の人物

レイチェルが戻ったとき、ロイは壁にもたれて座り、意識を失ったクロノスを守っていた。NIL-11Rは高負荷のあとでも安定していた。「どうやって生き延びたの？」「速くなろうとするのをやめた」

「C-05をどうするつもり？」とレイチェルが尋ねた。「連れていく」。政府は二人を追っている。クロノスが敵として差し向けられたことも、ロイは忘れていなかった。だが、白い部屋へ戻されることを恐れる子供を、ここに置き去りにはできなかった。

エイドリアンが証拠媒体と認証モジュールを持って合流した。ロイはクロノスを抱き上げる。「大臣は俺を追うために五人を送り込んだ。でも、造られた囚人は六人だったのかもしれない」。

遠くの大臣府では、C-05の遠隔服従復旧が拒否されていた。「FIRST WITNESS REQUIRED」。大臣は古い実験室を再開するよう命じた。十一年間閉ざされた、白い部屋を。

第8章　世界を歪ませる子供」— 完